

カード・マジック専門誌

The World Health Organization
Western
21-25 September 2009

aficio phado

edited by dr. masato mugitani
vol.6-no.5

エディー・ジョセフのカード・マジック

麦谷真里

(まえがき)Eddie Joseph(写真964)は、私どもの年代にとってはビッグ・ネームです。日本ではなぜか、「プレモニション」という作品で有名ですが、アボットがその商品名で売り出したとき、「エディー・ジョセフの」という冠を付けたからだと推察されます。しかし、残念ながら、「プレモニション」の創案者は William H. McCaffirey という人で、エディー・ジョセフではありません。

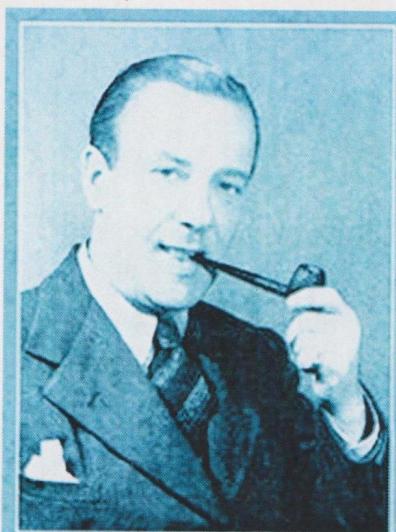


写真964

だからといってエディー・ジョセフの価値が減じるものではないのはもちろんです。エディー・ジョセフはカップ・アンド・ボールやカードなど、生涯に70冊以上の本を書いていて、かつての奇術界に対するその影響は測り知れないものがあります。今回、取り上げるのは、彼のカード・マジックのひとつ、「脈で当てるカード」です。私は、これを子どものころに覚えました。懐かしい「トランプ手品」で、誰から習ったのか忘れてしましたが、けっこう長い間、誰にも教えず大事にしていました。最近の洗練されたカード・マジックに比較すると、あまりにも古典的な匂いがしますが、まず、原案を紹介し、次に、そのメカニズムを分析して、現代的に展開してみたいと思います。出典を調べたら、“15 EXCITING MINUTES WITH A BORROWED DECK”という小冊子でした。

1. THROUGH THE BEAT OF THE PULSE

直訳すると、「脈拍を通じて」ということになりますか。[現象]は、シャッフルされたデックから客が自由に選んだカードをマジシャンが当てるものです。最初から最後まで、マジシャンが一度もデックの表を見ないのが特徴です。

[やり方]

- ①デック(52枚:ジョーカーを除く)を客にシャッフルさせます。客が満足行くまでシャッフルしたら、デックを裏向きのまま、テーブル上に置いてもらいます。「これから、お好きなトランプを1枚選んでもらいますが、公明正大に選んでもらうために、選び方を説明します」と言います。
- ②「これから私が説明する選び方は、あとで、私が後ろ向きになって見ていない間に、あなたにひとりでやっていただくことになりますから、よく見ていてください」と強調します。
- ③そして、デックの上から、右手で1枚ずつ裏向きのまま、カードをテーブル上に重ねて配って行きます。「こんなふうに、1枚ずつ、テーブルの上に重ねて行ってください」と添えます。
- ④このとき、説明しながら、5枚目のカードを置くときに、この5枚目のカードの右下隅を上方へ軽くクリンプします(写真965)。



写真965

- ⑤ただし、クリンプした場所で手を止めてはいけません。スピードを変えずに、さらに数枚のカ-

ドを重ね出します。「いま、一枚ずつ出していますが、気が向いたら、複数枚のトランプを一度に出してもかまいません」と言いながら、実際に、2, 3枚ずつのカードを一度に出して見せます(写真966)。



写真966

- ⑥「そして、お好きなところで配るのをやめてください。そうすると、2枚のトランプの可能性があります。それは、いま配ったばかりのトランプと、まだ配らずに残っている方の一番上のトランプです。どちらをあなたの選んだトランプにするかは、あとで決めますのでご安心ください」カードを配るのをやめて、選択肢が2つあることを説明しておきます。
- ⑦ここで、残りのデックを持ち上げて、いま配ったばかりのカードの上に重ねます。これで、クリンプしたカードは、ボトムから5枚目に来たことになります(写真967)。



写真967

- ⑧マジシャンは、後ろ向きになって、客に背中を向けています。「それでは始めてください。手を止めたら、私にお知らせください」と指示します。客が手を止めたら、さきほどの2枚の可能性に言及します。どちらを選ばれても、選んだカードが、配り重ねた山のトップになるように置いてもらいます。そして、この上に、残りのデックを載せて重ねてもらいます。重ねたらデックをよく揃え、数回カットしてもらいます。これで、客のカードはどこにあるか誰にもわからなくなりました。

⑨マジシャンは、ここで向き直ります。客のカードがどこにあるか誰にもわからないことを強調します。そして、客に、デックのトップから一枚ずつ左右に重ね配りながら、山を2つ作ってくれるようになります。(客の)左、右、左、右、と一枚ずつ重ねて行くのです(写真968)。



写真968

⑩このとき、マジシャンは、客が最初の左右一枚ずつのペアを置き終わったとき、心の中でひそかに「24」と数えます。声に出してはいけません。そして、その次の2枚のペアが置かれたら、「23」と数えます。次のペアは「22」、その次は「21」と数をひとつずつ減らして行きます。

⑪すると、どこかでクリンプしたカードが出てきます。そのときの数が α であったとします。ここで、2つの場合があります。それは、クリンプしたカードが、最初にカードを置き始めたときの左側の山に重ねたか、あるいは、その次の右側の山に重ねたか、です。このとき、最初に配り始めた左側の山にクリンプ・カードが置かれたら、 α をそのまま覚えます。しかし、クリンプ・カードが2番目に配り始めた右側の山の上に置かれたら、覚える数字は $\alpha - 1$ で、1をマイナスします(写真969:写真右側の山のトップにクリンプ・カードが来ています)。



写真969

⑫ここで、客のカードの最終的な場所を言うと、覚えた数字が α ならば、反対側の山の α 枚目に来ます。逆に、覚えた数字が $\alpha - 1$ なら、反対側の山の $\alpha - 1$ 枚目に来ます。

- ⑬ただし、以上のことばはマジシャンだけが知っていることですから、クリンプ・カードに気が付いたことはおくびにも出さず、そのまま客にカードを配り続けてもらい、2つの山を作らせます。
- ⑭ここで、客に、「どっちの山にあなたの選んだトランプがあるかわかりますか？」と訊ねます。客は「わからない」と答えます。ここで、どっちの山にあるかさえわからないのに、客のカードを当てるのは至難の技であることを強調します。
- ⑮そこで、客の脈でカードを探す、という振れ込みで、マジシャンの左手で客の手首をとって脈を測る（厳密には橈骨動脈の拍動）動作をします。マジシャンには、どちらの山に客のカードがあるかわかっていますから、脈を測りながら、あたかも、「こちらの山にあります」と言って、空いている右手で、客のカードのある山を指します（写真970）。

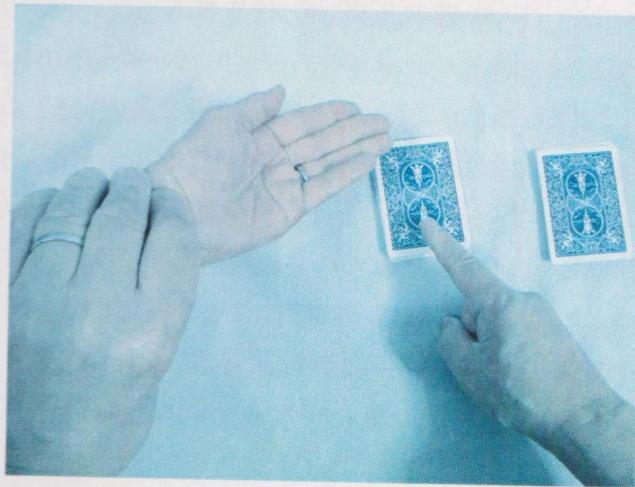


写真970

- ⑯いま仮に、客のカードがその山の α 枚目にあると仮定します。客の手首を掴んだまま、反対側の手で、その山を取り上げて、手首を掴んでいる方の手で、一枚ずつ、裏向きでテーブル上に出してくれるよう言います（写真971）。



写真971

- ⑰客が α 枚目を取り上げたら、客の手首を掴んでいるマジシャンの指に力を入れます。客が驚いて、手を止めますから、「それがあなたの選んだトランプです」と言います。手を離して、客に

確認してもらうと、正しく客の選んだカードです。

⑩以上がエディー・ジョセフの原案ですが、原案の記述よりかなりわかりやすく書いたつもりです。また、「24」から「23」、「22」と数え下って行って、「1」になってもクリンプ・カードが現れなかつた場合は、その次のペアを「26」と数えて、また「25」、「24」と数え下って行きます。すなわち、3-2-1-26-25-24です。言うまでもないことですが、「1」がクリンプ・カードだったら、これが最初に配り始めた山だったら、反対側の山のトップ・カードが客のカードです。2番目に配り始めた山だったら、 $1-1=0$ ですが、この場合の「0」は、「26」ですから、反対側の山の26枚目が客のカードです。

2. 「THROUGH THE BEAT OF THE PULSE」のメカニズム

- ①エディー・ジョセフの原案は上に述べた通りです。なぜ、そうなるのか、エディー・ジョセフの本には一切説明がありません。多くの読者は、おそらく、この通りに演じて來たし、現在も演じているものと思われます。しかし、素朴な疑問がいくつか生じます。まず、どうして5枚目をクリンプするのか？そして、なぜ、「24」から始めるのか？などです。
- ②それには倒叙的に客のカードの位置を考えます。仮に、客がカットし終わったデックのトップにクリンプ・カードがあったとします。すると客の選んだカードは、クリンプの下に4枚のカードがありますから、デックのトップから6枚目になります。ここで、左右に1枚ずつ置いて、2つの山を作つて行くことを考えますと、クリンプのペアを「X」から数え下るとします。いま、客の選んだカードは反対側の山の3番目のペアのトップに来ています。3番目のペアを作るまでに6枚のカードを使つていますので、残りは $52-6=46$ 枚で、これをペアにして2つの山に分けて行きますから、3番目のペアの上に、それぞれあと23枚のカードが配られます。すると、客の選んだカードは、クリンプ・カードのある山と反対側の山の24枚目に来ることになります。すなわち、 $X=24$ なのです。これで、最初のペアを「24」と数えることはわかつたと思います。
- ③5枚目をクリンプするのは必須ではありません。何枚目でもいいのですが、奇数でないと、クリンプ・カードと客の選んだカードとが同じ山になります。それでもかまわないのですが、計算がちょっと面倒になります。また、クリンプを11枚目のような大きな数にすると、これも計算が煩雑になるので、5枚目だと、クリンプのカードによってマイナス1にするだけで済みますから覚えるのが楽です。ひそかに数えた数が「1」になつてもクリンプ・カードが出て来なかつたら、ペアは26組しかありませんから、次は「26」から数え下ります。

3. いくつかの具体例

- ①客がカードを選んでデックをカットし、マジシャンが向き直つたところから始めます。客に、左右に1枚ずつ2つの山を作つて行ってくれるように言います。マジシャンは、最初のペアを「24」と心の中で数えます。続けて数えて行って、マジシャンが「18」と数えたときに、クリンプ・カードが配られたとします。ここで、場合分けがあります。
- ②山は、左右、左右の順でペアを重ねて行きます。そこで、クリンプ・カードが最初の左の山に配

られた場合は、最終的に反対側の山の上から18枚目に客の選んだカードが来ます。

③一方、クリンプ・カードが右側の山に配られた場合は、 $18 - 1 = 17$ で、客のカードは最終的にクリンプ・カードと反対側の山の上から17枚目に来ます。

④これは、よく考えると当然で、クリンプ・カードと客の選んだカードとの間には、4枚のカードがありますから、まず、客の選んだカードは必ずクリンプ・カードの山と反対側の山にあります。次に、クリンプ・カードが右側の山に配られた場合は、反対側の山の客の選んだカードの下に1枚増えますから、-1で対応します。

⑤もうひとつの例は、「24」から数え下って「1」になったのに、まだクリンプ・カードが出て来ないときです。その場合は、次のペアを「26」とひそかに数えます。次は「25」と、また数え下ります。仮に、「25」のときにクリンプ・カードがあったら、これが左側の山だったら、客の選んだカードは反対側の山の上から25枚目に来ています。一方、右側の山だったら、 $25 - 1 = 24$ で、クリンプ・カードと反対側の山の24枚目に客のカードがあります。

⑥さらに別の例も挙げておきます。もし、クリンプ・カードが出て来たときに、ちょうど「1」と数えていたら、クリンプ・カードが左側の山だったら、客の選んだカードは、反対側の山のトップに来ます。またクリンプ・カードが右側の山だったら、 $1 - 1 = 0$ で、すなわち、反対側の山の26枚目に来ています。

4. 現代的展開

"15 Exciting Minutes with a Borrowed Deck"は、1949年ごろの本です。このころのカード・マジックとしては、なかなか優れた作品だと思います。ただ、デックを2つに分ける作業をじっと見守るようなんびりした演出は、現代のような目まぐるしい時代には受け入れられない感じもあります。せっかくクリンプしたのだから、そこからすぐ近くにある客のカードを直接的に当てればいいと思うかもしれません、この作品の良さの一つは、マジシャンが一度もデックに手を触れないところにあります。そこで、ずっとマジシャンが手を触れないで速やかに客のカードを当てたいと思います。

①まず、客が、自分のカードを覚えてから、デックをカットしたところでマジシャンが向き直るところまでは同じです。デックがいまどんな状態になっているかと言うと、どこかにクリンプ・カードがあって、そこから下の5枚目に客のカードがあります。このままでは、カードの数が多過ぎますから、とりあえず、それを減らします。

②客に、「今度はトランプを3つの山に分けてください。正確でなくてもかまいませんが、大体同じくらいの山になるように分けてください」と言います。一枚ずつ置いて行くのではなくて、適当に3つの山に分けてもらうのです(写真972)。そうすると、マジシャンには、クリンプ・カードが分けられた3つの山のうちどの山にあるかわかります(写真973)。これは、そんなに凝視しなくても、カードが不揃いのところを見つければ、比較的容易に同定できます。そのために、クリンプを深くしたりする必要はありません。何回か実際にやってみると、クリンプの程度も会得できて、浅いクリンプでも同定できるようになります。



写真972



写真973

③このとき注意するのは、クリンプ・カードと客のカードとが同じ山になっていればいいのですが、52枚を3つの山に分けると約17枚ずつになりますから、クリンプ・カードと客のカードとが別々の山になっている可能性があります(写真974:右側の山のボトム付近にクリンプ・カード)。

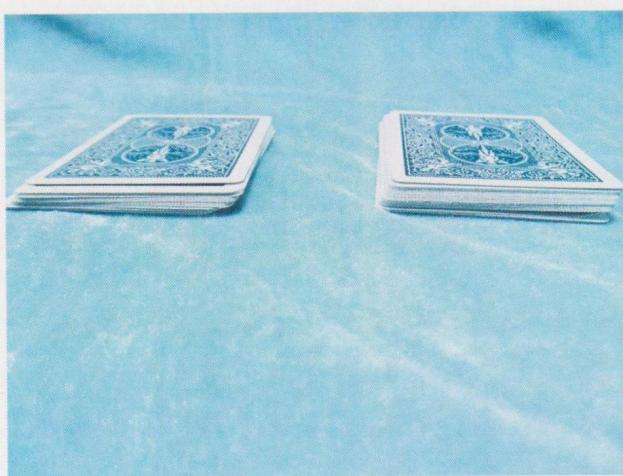


写真974

④クリンプ・カードの下に何枚のカードがあるのかを見ただけで同定するのは困難ですので、ここで場合分けをします。

⑤クリンプ・カードと客のカードとが明らかに同じ山にある場合は、その山をマジシャンズ・チョイスで客に選ばせます。そして、さらにその山を客に3つの山に分けてもらいますが、今度は一枚ずつ配って3つの山にしてもらいます(写真975)。ひとつの山の枚数は5枚程度になりますから、その過程で、配る順序を見ていて、クリンプ・カードの位置からマジシャンには客のカードの位置が同定できます。あとはお好きな方法で客のカードを当てます。



写真975

⑥クリンプ・カードと客のカードが別々の山にある場合(あるいは、一緒の山にあるかどうか不明な場合)は、3つの山のひとつのボトム付近にクリンプ・カードがあり、その隣に客のカードの山があることになります(写真976:中央の山のボトム付近にクリンプ・カード)。これは、客の分ける山を見ていれば、どっちの山が客のカードを含んでいる山かは明らかです。客のカードはむしろ、その山の上の方に位置しています。



写真976

⑦そこで、3つの山のうち、関係ない山を、テーブルの脇に除けます。次いで、クリンプの山と客のカードの山とをもう一度ひとつにします。すると、クリンプと客のカードはこの合わせた新しい

山の中央付近に来ます(写真977)ので、トップ付近とボトム付近とから、5枚ずつくらいのカードを、さきほど脇に避けた山の上に捨ててもらいます。これで、残りはクリンプと客のカードを含む15枚くらいになりました。



写真977

⑧あとは、この最後の山を一枚ずつ3つに配ってもらえば、配る順序を見ていれば、客のカードの位置が同定しますので自分のやり方で当てます。

5. コメント

無理に現代的な展開をする必要がないのはもちろんです。客のカードが何であるか最後までわからないのに、客のカードの同定ができるところに面白みがあります。マジシャンが一度もデッキに手を触れないのも魅力です。Max MavenのDVDには、これと似たようなカード当てをこれでもか、これでもか、と解説したものがあります。その観点からは、後半の当て方は、十分に現代的だと言えるのです。

最新の2つのカード新商品について

麦谷眞里

最新のカード商品というのは、Craig Petty という人の"QUANTUM DECK"(\$39.95 約4800円)とRoberto Giobbi の"Red Card"(\$39.95 約4800円)の2つです(写真978)。前者は、マーフィーズ・マジックからの供給なので、どこのディーラーでも売っていますが、後者は、ペンギン・マジックの商品なので、ペンギン・マジックの系列のディーラーでないと入手できません。日本のディーラーでも扱っていますが、両方とも、かなり長い URL での解説ですので、それを日本の販売店がどのように解決しているのか、私にはわかりません。タネの要点のみ日本語で説明しても、おそらく全容を理解するのは難しいと思われます。

さて、最初にお断りしておきますが、両方とも4800円で購入して損はしません。なぜなら、自

自分で作ってセットするには、材料費と手間でたぶん4800円以上かかるからです。私は、それぞれの販売元から宣伝のメールが来て、演技の動画を見て、正規料金と送料とを負担して買いました。実を言うと、宣伝の演技の動画を観ただけで、両方とも、タネと言うか、ギミックと言うか、おおかたのやり方はわかつてしましました。それでも、どうしてもわからない部分が残りましたし、さきほど述べたように、自分で作るより買った方が早いし安いし、と思って買いました。それには、解説のURLで、創案の経緯とか参考文献とか詳しい説明を聴きたいという欲求もあったのです。



写真978

1. QUANTUM DECK

Quantum というのは、量子のことですが、飛躍的とか突然の大きな増加の意味でも使います。現象を述べないで考察してもわからないので、最初に現象を述べますと、マジシャンは両面ブランクのデックを持ち出し、客に52枚の任意の枚数を言わせます。すると、その枚数から、1枚だけ、表と裏のあるカードが出て来ます。ほかのカードはすべて両面ブランクです。宣伝動画には、何人もの有名奇術家が出てきて、Web で演技動画を観て、「まったくタネがわからない」などとコメントします。かなり有名な奇術家も含まれています。商品は、両面ブランクのデックです(写真979:2枚ずつラフ加工されているので全体の枚数の少ないのがわかると思います。)

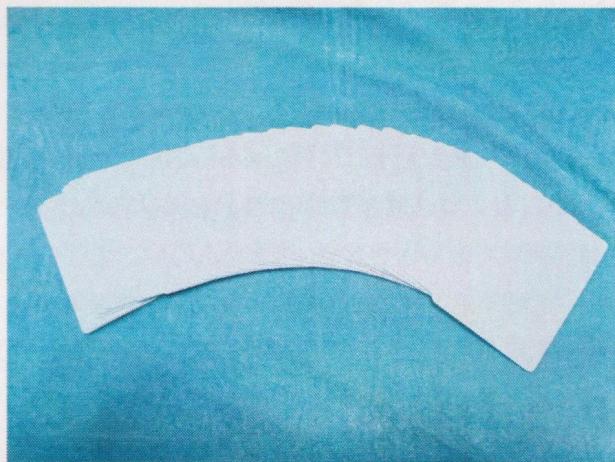


写真979

私は、最初、セカンド・ディールかと思いました。セカンド・ディールを練習した人はすぐにわかると思いますが、バイスクルなどより、ビーやスティーム・ボートなどの白い縁のないカードの方が容易にできます。それは細かな裏模様が繋がって見えるので、少しくらいカードをずらしても目立たないからです。それをブランク・デックでやるのなら、もともとすべて真っ白ですから、セカンド・ディールは本当に容易です。何枚目と言われようと、そこまでセカンド・ディールをすればいいのです。表と裏のあるカードは上から2枚目に配置しておいて、最後の枚数目の1枚手前にトップのブランク・カードを配れば、ピタリと客の枚数目に出て来ます。ただし、それまでトップのブランク・カードと2枚目の表裏のあるカードとはくっつけておかねばなりません。これはラフ加工で可能です。

この考え方の隘路は、セカンド・ディールでは商品にならないことと、40ドル近いお金は取れないということです。そこで、トップ・カードと2枚目の表裏のカードをくっつけるためにはラフ・アンド・スマーズを使うんだろうな、と思ったときに、しかし、思考はそこで止まり、全体を構築するまでに至りませんでした。ただ、宣伝の動画に出ていた幾多の奇術家たちは、私が気が付く程度のことはみんな気が付くはずなのに、質問もしないし、指摘もしなかったりしたのは、同業者のよしみとでは言いませんが、おそらく「礼儀」なのだと思います。あるいは、タネを指摘した動画は没にされたのかもしれません。この手品は、いわゆる、ACAN(Any Card Any Number)の亜型で、客の指定した場所(枚数目)から客の指定したカードが出て来る、という現象のうち、客の指定したカードではないけれど、両面ブランク・デックの中の指定した枚数目から、表と裏のある実体のあるカードが出てくるという現象なのです。見せ方は、仮に客が13枚目、と言ったら、デックを上から一枚ずつ、表と裏を見せながら、両面ブランクであることを見せてテーブル上に置いて行き、13枚目に表と裏のあるカードが出て来るものです。もちろん、デックの残りのカードが両面ブランクであることも見せられます。17枚目と言われても、25枚目と言われても可能です。本当に目の前のクロース・アップで見たらどうかわかりませんが、少なくとも動画やWebで実演を観た限りでは、およそタネはわかりません。しかしながら、実は、客に3枚目とか5枚目と言われると苦労するのです。そこが、私が先に「どうしてもわからない部分が残る」と言わしめた箇所です。しかも、実際の商品でも解決してなかった部分なのです。解決法は一応の説明はしてありますが、少なくとも初心者には無理です。練習してみると、けっこう難しくて、私は上手にできるかどうか自信がありません。文句を言っているわけではありません。正直な感想です。そもそも、ダブル・ブランクのデックなど、ケースから出して来た段階で、怪しさもここに極まれり、です。でも、自分でラフ加工して作るのは面倒なので、ひとつは買っておくと良いと思います。

2. Red Card

これも、現象を先に述べます。マジシャンは、赤裏のカードを一枚示してから、これを青裏のデックの中に入れてシャッフルします。次いで、客に任意の一枚のカードを言ってもらうと、さきほど青裏のデックに入れた赤裏のカードが客の選んだカードだったのです。ちょっとまわりくどい感じがします。これは、最初に宣伝の動画を観たとき、ただちにタネがわかりました。そして、何もこんな

私は、最初、セカンド・ディールかと思いました。セカンド・ディールを練習した人はすぐにわかると思いますが、バイスクルなどより、ビーやスティーム・ボートなどの白い縁のないカードの方が容易にできます。それは細かな裏模様が繋がって見えるので、少しくらいカードをずらしても目立たないからです。それをブランク・デックでやるのなら、もともとすべて真っ白ですから、セカンド・ディールは本当に容易です。何枚目と言われようと、そこまでセカンド・ディールをすればいいのです。表と裏のあるカードは上から2枚目に配置しておいて、最後の枚数目の1枚手前にトップのブランク・カードを配れば、ピタリと客の枚数目に出て来ます。ただし、それまでトップのブランク・カードと2枚目の表裏のあるカードとはくっつけておかねばなりません。これはラフ加工で可能です。

この考え方の隘路は、セカンド・ディールでは商品にならないことと、40ドル近いお金は取れないということです。そこで、トップ・カードと2枚目の表裏のカードをくっつけるためにはラフ・アンド・スマーズを使うんだろうな、と思ったときに、しかし、思考はそこで止まり、全体を構築するまでに至りませんでした。ただ、宣伝の動画に出ていた幾多の奇術家たちは、私が気が付く程度のことはみんな気が付くはずなのに、質問もしないし、指摘もしなかったりしたのは、同業者のよしみとでは言いませんが、おそらく「礼儀」なのだと思います。あるいは、タネを指摘した動画は没にされたのかもしれません。この手品は、いわゆる、ACAN(Any Card Any Number)の亜型で、客の指定した場所(枚数目)から客の指定したカードが出て来る、という現象のうち、客の指定したカードではないけれど、両面ブランク・デックの中の指定した枚数目から、表と裏のある実体のあるカードが出てくるという現象なのです。見せ方は、仮に客が13枚目、と言ったら、デックを上から一枚ずつ、表と裏を見せながら、両面ブランクであることを見せてテーブル上に置いて行き、13枚目に表と裏のあるカードが出て来るものです。もちろん、デックの残りのカードが両面ブランクであることも見せられます。17枚目と言われても、25枚目と言われても可能です。本当に目の前のクロース・アップで見たらどうかわかりませんが、少なくとも動画やWebで実演を観た限りでは、およそタネはわかりません。しかしながら、実は、客に3枚目とか5枚目と言われると苦労するのです。そこが、私が先に「どうしてもわからない部分が残る」と言わしめた箇所です。しかも、実際の商品でも解決してなかった部分なのです。解決法は一応の説明はしてありますが、少なくとも初心者には無理です。練習してみると、けっこう難しくて、私は上手にできるかどうか自信がありません。文句を言っているわけではありません。正直な感想です。そもそも、ダブル・ブランクのデックなど、ケースから出して来た段階で、怪しさもここに極まれり、です。でも、自分でラフ加工して作るのは面倒なので、ひとつは買っておくと良いと思います。

2. Red Card

これも、現象を先に述べます。マジシャンは、赤裏のカードを一枚示してから、これを青裏のデックの中に入れてシャッフルします。次いで、客に任意の一枚のカードを言ってもらうと、さきほど青裏のデックに入れた赤裏のカードが客の選んだカードだったのです。ちょっとまわりくどい感じがします。これは、最初に宣伝の動画を観たとき、ただちにタネがわかりました。そして、何もこんな

もうひとつのカード・マジック商品

麦谷眞里

ギミック・デックついでにもうひとつコメントします。これは、新しい商品ではありません。“GET SHARKY”という商品名のデックです(写真981)。

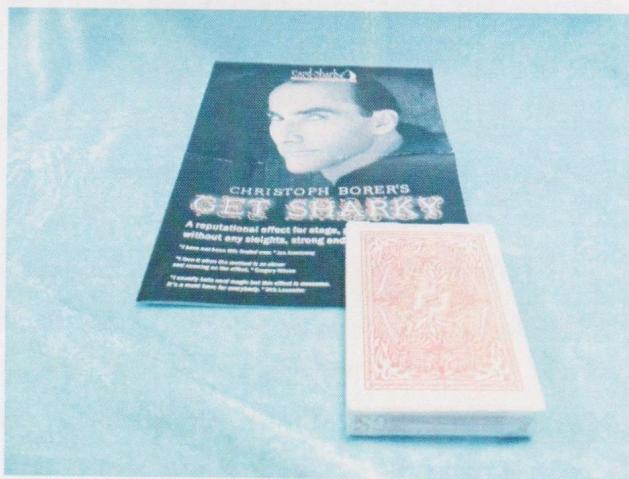


写真981

デックがひとつ付いてくるだけで\$79.95もします(約9800円)。演技を観ると、何となく途中まではタネが類推できるのですが、最後にびっくりします。ドイツの card-shark の製品と言えばわかると思いますが、他のメーカー(バイスクルなど)では作れません。

現象は、客が自由に選んだカードがデックから消えて、マジシャンのポケットから出て来るというものです。なんだ? それだけ?と思われるかもしれません。客の覚えたカードがデックにないことを点検するのは客自身です。客にデックを渡すのです。次に、マジシャンは、客が覚えたカードの名前を言う前に、ポケットから裏向きでカードを出します。もちろん客の覚えたカードです。

二重、三重に不思議なのです。

このデックを手にすると、カード・マジックもここまで来たか、と思います。デックは、一種のスペンガリーですが、フォースできるカードは一種類ではありません。客に手渡しても気付かれるのは、ダブル・デッカーの2枚が下部でくっついているからです。さらに、一種のマーケット・デックになっていますので、事前に客のカードがわかります。自分で演ってみたいと思うマニアは、かなり手の込んだこのデックを自分で作ることは至難の技ですので、€75もしくは\$80出して買うしかありません。面倒くさいデックなので在庫がなくなる前にどうぞ。

これは、aficionado の Vol.6-No.5 です。

郵便の送付先: 〒145-0061 東京都大田区石川町2-33-1-904 マスカレイド

Eメール・アドレス: masqpart4@aol.com

これは、限定100部のうちの08／100です。

(2022年4月)